

「子どもが地域愛を育むプロセス」

ーまちづくり・地域活性化原論としてー

国立大学法人 東京農工大学 名誉教授

講師 千賀 裕太郎 氏

ご紹介いただきました千賀でございます。今日の話は「子どもが地域愛を育むプロセス～まちづくり・地域活性化原論として～」です。

今日ほど地域で、子どもの育ちの環境がなおざりにされている時代はありません。子どもが健全に成長するには地域の「人・自然」との濃い接触が必要です。その中で豊かに育てられた子どもは、地域への愛を育み、やがて地域づくりを担う大人に成長するのです。実は、日本列島ほどこうした条件に恵まれた地域はありません。「まちづくり・地域活性化」のあり方を「子どもの成長」を原点にして、じっくりと考える機会にしたいと考えています。日本の国土がどんな国土なのかということも、子どもたちとの関係でお話したいと思います。

子どもの問題について私が興味を持ったのが東京農工大学地域生態システム学科で学生に教え始めたときのことでした。環境保護、自然保護に興味のある学生の何%かは人間不信の念を持って入学してきます。「人間が自然を壊している、人間はけしからん」という感じです。それを突き詰めていくと「人間悪」、人間というのはどうしようもない動物であると考えようです。二十歳前後の学生達の少なからずがそういう気持ちを持って入ってくる。つまり言葉を変えると、ニヒリズムに陥っているのです。

場合によってはそのまま大学を出て、そして自然保護団体等に入り、人間嫌いを強め、自然至上主義のようになっていくようです。それは時代が生んだ精神でしょう。

しかし、それでは物事は解決しないのです。人間嫌い、人間は悪なのだ、という性悪説を持った人の言葉を市民がすんなり受け入れるこ

とは難しいのです。そういう感覚から出てくる論理も、極めて非人間的な論理になりかねない。それはまずいぞ、というように気づきました。

自然といってもいろんな自然があります。人間が手を入れない原始的なピュアな自然もあれば、少し手を入れて、まだ自然がかなり残りつつも、人間が少し利用させてもらうような自然もあるし、そしてある意味では完全に土の上に生えている植物を除去して、人間に有用な作物を植えるところも自然といえば自然だろう。そのどれもが我々人間にとっては必要な自然であり、そのどれも大事にするような思想が創れないのだろうかというようなことも感じました。

そのとき、人間だって本来は自然じゃないのかと思いました。人間は機械でできたロボットではない。人間も、サルなりオオカミなりと同じように生き物であり、哺乳類であるのです。しかしそれがあたかも自然でないかのように人間自身が思ってしまうところに大きな落とし穴があるのではないかと。そうなると、自然が壊れていき、あるいは自然保護の思想そのものも「人間が悪いのだ」として人間を攻撃するようになってしまったときに、いったい人間はどうなってしまうか、非常に心配です。人間は今の段階でちゃんとしているのだろうか、ということを考えざるを得ないと思ったのです。

今日のお話のメインも、言わば人間の内なる自然、人間の持っている本来の自然的な要素を、もう一度我々は見直さなければいけない。そして、どういう環境—社会的環境もあれば自然的環境もあるわけですが—が人間にとって最も重要なのかを、もう一度見直す中で地域のあり方を考える必要があると思ったのです。

今日の話では、子どもが地域に対して愛着を持てるような条件というのは何なのだろうかということを中心に考えたいと思います。それが子どもの発達との関係に主なポイントがあると思ったからです。

その前座・第一部として日本の「国土文化形成」の基礎論についてお話しします。第二部は「人と地域」の関係性原論です。人間が環境とどういう接触をしながら人間らしさを作っていくのか、とりわけ「知性」がどのように創られるのかを語っているギブソン、あるいはエドワード・レルフという人の話を引き合いに出しながら、私の研究室でやった調査も紹介して、人間と地域の関係についての原論的な話をします。

「人と地域」の関係性原論というのは、都市計画なり農村計画なりの地域計画論ではこれまでほとんど議論されてこなかった分野です。技術的な問題はたくさんあって、それは研究もされ、体系も作られてきたのですが、私はもう一枚皮を剥いで、人間と都市、あるいは人間と農村との関係の基礎をきちんと掴まないと、本当はしてはならないような地域づくりもしてしまうのではないかと思います。その辺のところはまだまだ十分ではないと思い、その取り掛かりだけでもつけたいと思っています。

第三部は「子どもが地域で人として成長し、地域愛を育てるプロセスとは」ということです。子どもがどんなふうに育っているのか、本来どうあるべきなのか。これは私の専門ではありませんが、大脳生理学、発達心理学といった方々の成果を少しお借りしながら論じて行きます。

■第一部 日本の「国土文化形成」の基礎論

私は今好きなものが2つあります。1つはスポーツ。北海道生まれなのでスキーが大好きですが、テニスも少しやりますし、野球も相撲も好きです。そしてもう1つ、何といても今好きなものは歌なのです。とりわけ日本歌曲ほど豊かな自然の表現と人間の情緒を歌い込んだものはないと思います。幸い日本には様々な国の歌曲がたくさん入ってきています。アメリカの

フォスター等の創った歌曲、多くのロシア民謡、オペラのアリアあるいはカンツォーネなどのたくさんのイタリアの歌曲、あるいはイギリスの民謡、アイルランドの民謡もあります。そういうものと比べても日本は非常に豊かな情緒、それも自然とのかかわりとの情緒を歌い上げたものが多いのです。

「どこかで春が」なんかもいいですね。この歌詞を読むだけでもすごいですよ。

「どこかで春が」

百田宗治

どこかで春が 生まれてる
どこかで水が 流れ出す
どこかで雲雀が 啼いている
どこかで芽の出る 音がする
山の三月 東風（こち）吹いて
どこかで「春」が うまれてる

芽の出る音を聞いたことがありますか。本当に音がするのだらうなと思います。良い詩ですよ。こういう素晴らしい詩が美しい旋律にのって、日本では歌われるわけです。

夏になりますと、「夏は来ぬ」

「夏は来ぬ」

佐佐木信綱

卯の花の 匂う垣根に
ホトトギス 早も来啼きて
忍び音もらす 夏は来ぬ
五月雨の そそぐ山田に
早乙女の 裳裾ぬらして
玉苗植うる 夏は来ぬ

昔は「田植え」は初夏の風物だったようですね。これも本当に良い歌です。

詩も旋律も本当にいいですね。

ほとんどが明治から大正にかけての、いわゆる文部省が唱歌を作ってきたころの歌曲です。そこで少し調べてみました。また私の友人の古典文学の川村晃生先生にも伺ったのですが、どうやら日本の和歌を承けているようです。和歌

を詠む人、大学で文学を教える人などが古代の和歌から歌詞を借りるなどして、気合いを入れて唱歌の歌詞を創ったようです。もちろん背景には、当時、西洋音楽が入ってきたという事情がありました。西洋音楽の旋律にのせてどんな歌を子ども達に提供したらいいのだろうか、ということで一大事業になったのではないかと思います。そういうこともあって音楽的に非常にレベルが高いと同時に、非常に優れた自然の描写や、そこから受ける想いを表現しています。

次は少し寒くなったときの「野菊」です。

「冬景色」も良いですね。どれもいいです。

「冬の夜」これは、子どもが囲炉裏端で親と一緒に夜を過ごしていて、春になるとこんな楽しいことができるよ、と指を折りながら春を待っている、外は吹雪だという、まことに素晴らしい詩だろうと思います。

「冬の夜」

文部省唱歌

ともし火近く 衣（きぬ）縫う母は
春の遊びの 楽しさ語る
居並ぶ子どもは 指を折りつつ
日数かぞえて 喜び勇む
囲炉裏火はとろとろ 外は吹雪

囲炉裏の端に 縄なう父は
過ぎいくさの 手柄を語る
居並ぶ子どもは ねむさ忘れて
耳を傾け こぶしを握る
囲炉裏火はとろとろ 外は吹雪

「叱られて」なんかも非常に静かで悲しさなど叙情豊かな詩になっています。

「春の小川」という歌があります。私はこの「春の小川」がどんな川なのかを絵にしたいと思いました。こういう童謡、唱歌というのは案外いい加減で、歌詞が描いている情景・風景は比較的単純で正確性を欠くものと私は高をくくっていたのですが、この「春の小川」について

少し分析してみました。余談ですが、最近の学生はこの歌を知っているとは限りません。大学の一年生、二年生に「春の小川」を知っているかと聞いたら、知っているのは1/3くらいです。

「春の小川」

高野辰之

春の小川は さらさら行くよ
岸のすみれや れんげの花に
すがたやさしく 色うつくしく
咲いているねと ささやきながら

春の小川は さらさら行くよ
えびやめだかや 小ぶなの群れに
きょうも一日 ひなたでおよぎ
遊べ遊べと ささやきながら

実は「春の小川」に日本列島における国土作りの原理が歌いこまれていたことを発見して驚きました。少し歌詞を検討してみましょう。

「さらさら行くよ」とありますがどんな川でしょう。「どんぶらこ、どんぶらこ」という桃太郎の川とは大分違います。桃太郎の川は揺れ動いて水が流れているかなり急流で石や岩がある上流域の川。でも「さらさら」となるとそうはいきません。かなりゆっくりと、しかし安定して流れる川ということになります。

そして「岸のスミレ」ですから岸が土でできていて青いスミレが咲いている。レンゲの花はご存知のとおり水田に咲いています。稲刈りが終わって寒くなる頃に水田に種を蒔いて、翌年花を咲かせます。それはレンゲが空中の窒素を固定してくれる肥料作物だからです。これで水田のそばを流れている川だということがわかってきます。

それから「エビ」「メダカ」「コブナ」が出てきます。どれも特徴がありますが、特にメダカ類はうんと小さい魚です。魚というのは大きいほど速く泳ぎます。魚学の専門書によれば魚には巡航速度（安定してゆっくり、ずっと同じようなスピードで泳ぐスピード）と突進速度（急にぱっと逃げるような速度）が、それぞれの魚

の固有の値としてあるそうです。

メダカは小さい魚なのですが、突進速度は速く、ぴゅっといきます。だけど巡航速度は非常にゆっくりです。つまりゆっくりした流れでしか泳げない、生きていけない魚ということになります。そうするとゆっくりと非常に安定していて、緩やかに流れている川で、岸にはスマレが咲いている、そして傍にはレンゲの花の咲いた水田がある。つまり「春の小川」は農業用水路を歌った歌だということです。定説では東京の渋谷川だといわれています。これまで話した分析を絵にするとこんな感じです。(図1)



図1 「春の小川」 (乳深真美)
(千賀 裕太郎『よみがえれ 水辺・里山・田園』
岩波ブックレット,1995 年)

これは私の研究室の博士号をとった女子学生乳深真美さんが私と相談しながら描いてくれた絵です。これが「春の小川」です。家の近くでは水車を回して、そしてこの川から水田に水を入れていきます。絵の右上の方に見えるのが自然の河川です。自然河川から農業用水路、ちょっと上に堰があるのですが、堰から横に水を分岐して水を入れてくるという川です。

日本の川と外国の川を比べた断面図を見えます(図2)。横軸が距離で縦軸が標高です。日本の川、これは信濃川ですけれども極めて急流です。ヨーロッパのライン川は源流はアルプスなので急ですが、スイス・ドイツの国境のボーデン湖あたりからは、とても緩やかな川となります。このように同じ川でも日本と大陸の川

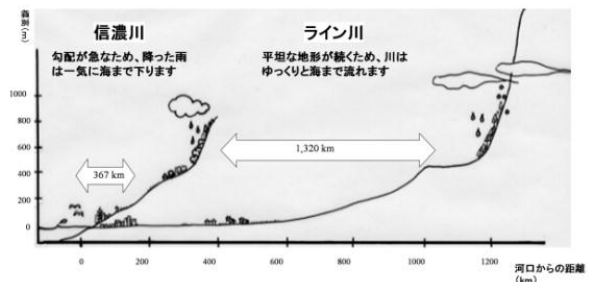


図2 日本の川とヨーロッパの川(ライン川)
(千賀 裕太郎『よみがえれ 水辺・里山・田園』
岩波ブックレット,1995 年)

はまるっきり状況が違います。さっきの春の小川も、こういう川が急勾配の地域でも水田が作られるように工夫して作られた農業用水路です。

このように急勾配でありながら、日本人は今、日本列島に1億2000万人住んでいます。1億2000万人がどういうレベルの数字か皆さん考えたことがありますか。日本の人口は世界で何番でしょうか?10番です。たいしたものだと思いますか。

日本の国土には、それだけの食料を作るパワーがあるということです。それはこんな急傾斜でも工夫してきたからです。急傾斜ですから降った雨は放っておけば縦(等高線に直角)に流れていくところを、できるだけ横向き(等高線になるべく沿って)に流そうとしたのです。

ちょうど人間の毛細血管のように、日本列島には無数のといってもよいくらいに水路を作り、まっすぐに一気に海に流してしまうのではなく、できるだけ横に流すことで、その場その場で米を作り、人が安全に住めるようにしたということです。

もうひとつは、放っておけば水は下へ流れますが、「留める」ということをしました。溜め池を作る、あるいは水田に水を蓄える。溜め池は日本に21万か所あります。水田は260万haあります。水田と溜め池には水が溜まるということですから、溜まった水の表面は水平だということです。ですから溜めるための土手のようなものを水田にも、溜め池にも作るわけです。こういう形で水を一度止めるのです。

そして次に、地下へ流すということをしまし

た。森林をきちんと管理して、降った雨が木の枝から幹を伝って地下へ入っていきます。森林を作っておくと、この下にスポンジのような柔らかい土ができます。植物の葉っぱが落ちて、それが腐敗して非常に豊かな柔らかい土ができるわけです。その柔らかい土のことを日本では「表土」と呼んでいます。

ドイツでは表土をすごく大事にします。道路工事をすると、その道路の横にはかまぼこのような形のビニールで覆ったものが横に並んでいます。これは道路工事で剥ぎ取った表土を捨てずに保存しているのです。これは連邦建設法という法律で義務付けられているとのことでした。残念ながら日本は「捨て土」という言い方をしてほとんど捨てます。表土くらい大事なものは無いというのがヨーロッパの考え方です。その証拠にドイツでは表土のこと「ムッターボーデン」と呼んでいます。「ムッター」は「マザー(母)」、「ボーデン」は「土」です。「マザーソイル」、母なる土、「母土」と呼んでいるわけです。それくらい、表面にある土壌を大切にしています。その土壌はあらゆる命の源だというわけです。

その母土、表土が日本はヨーロッパに比べて質、量ともに優れているのです。ミネラル分が豊富で、有機質も豊富でしかも厚く表面に積もって、あるいは流されてきて厚く溜まっています。ヨーロッパでは氷河期が終わって温暖になるときに、氷河がアルプスからずり落ちてきて、表土を削って北海に全部とんでもないくらいに運んでしまっただけで、表土(母土)が非常に薄くなってしまったのです。しかも、日本に比べれば寒冷で、雨も1/2から1/3くらいしか降りませんので、植物の繁殖力は弱いのです。日本は「雑草」が生えて困るなんて贅沢なことを言いますが、穀物を生産するパワーはヨーロッパの3倍から4倍あります。だから狭い国土でも十分な食料の自給力があって、1億2000万人、世界の10番目の人口を養っているのです。

私達が子どもの頃、「日本は狭い国土で、山がちで、傾斜も急だから貧しいのだ。だから工業化をして加工貿易で生き残っていかなければいけない」という教育を受けたのです。今思うと

嘘っぱちです。日本の国土ほど食糧を生産するパワーのある地域はないのです。その証拠は、つい近年まで世界でも有数の人口を米を中心とした自給穀物でちゃんと維持できてきたということです。それを抜きに、工業化を進めてもおそらく大失敗すると思います。日本の豊かさを象徴する歌がこの「春の小川」で、その環境の姿こそがこの風景(図1)だということになります。

このように日本は本当に豊かな国なのだとすることを申し上げておきたいと思います。さっきもちょっと言いましたが、自然には手付かずの自然という「原生自然」がある一方で「二次的自然」と呼んで人が手を加え維持してきた自然であって、里山と呼んだり、雑木林と呼んだり、水田、水路、溜め池といったものがあります。こういった「原生自然」と「二次的自然」の両方があって、日本人は幸せに暮らせる、そういう条件があるということです。

しかも水田には、野生動物がいっぱい来ます。例えばシオヤトンボの産卵は田植えの頃と同じ頃ですけれども、ノシメトンボ、ナツアカネ、アキアカネなどの産卵は稲刈りの最中や後に見られます。生き物によって違うのです。どうやら早い時期に産卵に来るのは北の方から渡って来た昆虫で、比較的温かくなってから産卵するのは南の方から日本列島に入ってきたものだとされています。このように様々な野生動物たちが二次的自然である自然の中で生を営むわけです。ある意味で、人間と自然、動物達が信頼関係を保って伝統的に日本の自然を作ってきた。それがさまざまな歌曲にも歌われるほどの情緒ある文化を創ってきたということになると思います。

水田で生まれるナマズは水田から一度川に戻って水路を遡上して水田に戻って卵を生む。ドジョウは川までは行きませんが水路までは行く。だから移動路を断ち切ると、こういった動物たちが棲めなくなってきました。一時かなりそういう自然破壊的な公共事業を日本でも行ってきましてけれども、それに対する反省から生態系配慮型の基盤整備をするということになっていっ

たということです。もともと農村生態系というのは、人間と生き物との相互信頼の関係ができていることになります。

そういう意味では最初に触れたように「人間は自然の敵だ」というニヒリズムに陥らなくても良いのだということなのです。

水田で繁殖するドジョウも田植えの直後に親が水田に入り、そして中干しの頃一ちょうど今の時期、暑いときに水田から水を抜いてひび割れをさせて根を強くする一に一度落水するときに未成魚が巣立っていくのです。

「どんぐりころころ」なんかもそうです。どんぐりはいわゆる雑木林にあるクヌギやコナラなどの落葉樹の実です。雑木林というのは単なる自然植生ではなくて、その幹あるいは枝を切って家を作ったり炭にしたりして人間の生活に使われた所で、切った後からまた幹が次々に再生してきます。

実は今日、私が申したいのは日本の国土は豊かな一次的自然と二次的自然に満ちていて、そこで子ども達は自然と接触した遊びをしながら、友達とともにすくすく育ってきたのだということです。

たまたま先日NHKで短歌フォーラムをやっていて、こんな短歌が最優秀賞でした。

温かい泥にもぐって
どちゃうのように
眠っていたい
古里の川

(今井紀子「第27回全国短歌フォーラム in 塩尻」最優秀作品)

いいですね。まさにさっきの「春の小川」です。要するに「泥」というのでそれがわかるのです。水田のすぐ横ですから、水田から出たり入ったりする水の中に非常に細かい粒子の土、つまり泥が入っているのです。その泥が用水路に、あるいは排水路に、水田の中の水路に落ちます。この水路は「横向き」に流れていて流速が遅いので、泥は流されずに溜まります。そこがちょうどいい潜る場所になる。

このように日本人の多くの子ども達は、1960年代くらいまではこういうところで育ってきたのです。この川はさっきの用水路ですね。「温かい」ということは「浅い」ということです。太陽の光が当たって温まるのですが、深ければ水量が多いのでそうは温かくなりません。そこで浅くて速度の遅い流れの用水路で温かくなるというわけです。これも一つのリアリティを表現した歌だということになります。

この短歌の作者は、幼児の時のこの二次的自然での体験が大人になってからの感性や思想の基礎になっているということです。今はそういう川はもうないけれども、この短歌を歌った方の心の中には、今も同じように残っているという歌なのです。

「ヒトが人になるプロセス」には自然的環境と社会的人間的環境と両方が必要です。そこには愛情と自然から与えられる情景というものが必要です。私が今一番心配しているのは、そういうものを失った今の子どもは大丈夫なのかということです。

日本体育大学教授の眼科の先生が、『食べもの通信』という月刊誌(2014年10月号)で書かれています。テレビあるいはケータイゲームといったデジタル情報の画面を、今の子どもは毎日どれくらい見ているかというデータです。小学生では平日1日の平均が、345.5分です。これは6時間近くです。愕然としました。休日だと450分です。中学生だと平日が402.2分、休日が534分です。本当にすごい。中学生の休日では8時間54分、つまり起きていうちかなりの部分がそれを見ている時間ということです。これは大きな問題です。

いや、このことがまだ大きな問題だと思われることが、大問題なのです。少なくとも眼科の立場からいうと、視力の低下が始まっている。これはゲーム等のデジタル機器が影響しているといっています。それは様々な要因だろうと思いますが、その映像内容の特徴もありますが、画面から出ている波長の短いブルーの光線を含む電磁波が相当影響していると言われて

います。このように子どもの環境条件が昔とは全く違ったものになっているということです。

■第二部 人と地域の関係性原論

人間は「ヒト」から「ひと」そして「人」にどのように健全に成長するか、私の問題意識としては、これを地域づくりとつなげて考えてみたいと思います。

この「ヒト」というのは生れ落ちてすぐの野生動物的な「ヒト」です。それから平仮名の「ひと」はいわゆる人間になったという感じです。そして「人」は大人になった状態と考えてください。どのように成長していくのでしょうか。

実はこういうことを我々は普段考えないのです。「子どもは大人の背中を見て育つ」というのは、私は非常に無責任に思います。いや、それもいいでしょう、かっこいいでしょう。俺の働いているところを見せてやる。家のすぐそばで働いている職人さんならまだ良いです。しかしサラリーマンが「俺の背中を見て育て」と言ってもほとんど何のことも子どもにはわからない。それが子どもに干渉しない、ある意味で現代的な大人の理想の姿だと思い込んでいる人がたくさんいらっしゃいます。だけど子どもはちゃんと育てないと、ちゃんと大人になれないのです。そのことを多くの日本人は忘れてしまったように思えます。

日本人は、どんなところでも子どもは育つ、と思い込んでいる。例えば、ドイツ、イギリスなどの欧州では5階建て以上のアパート・マンションには、小学生以下の子どもがいる家庭は入居してはいけないと決められているようです。日本ではそんなことはないです。30階、40階と高層の方が値段が高く、ステータスがあるのだそうです。全く異常だし、全くわかっていないのです。

東大医学部の先生がヨーロッパでは子どもを育てる上で住居に高さ規制があることを知って、調査したところ、5階以上で育っている子どもとそれより下の階の子どもでは発達に差が出ているという結論を出しています。パンツが自分

ではけるとか、そういう類いの小さい子どもにとっては成長発達の大事なメルクマール、そういったところに差が現れるということが発表されていますが、我々日本人はそういうことをあまり考えないのです。どうやったって子どもはたくましく育つのだと思っているようです。しかし、子どもにしてみれば「高いところにいることが何か不安だ」という声なき声でしょう。そして具体的には下へ降りて他の子ども達との遊びそのものも制約される。エレベータを使わなければならない、親がいなければ降りてはいけない。高層階は子どもの発達に影響があるということが本当は我々にとっての常識になっていなければならないと思います。

しかしそんな情報はほとんどない。つまり日本では「人間はどうやって成長していくのか」ということに、ほとんど何の関心もないということです。よく言えば、「どうやったって育つのだ」という過信かもしれません。そうした過信を我々は崩していかなければならないので、これはなかなか大変なことです。

それがこの問題意識の根底部分なのですが、それを地域の問題として考えてみたいと思います。少々面倒ですけど、2つのやや哲学的な議論を紹介します。

1つは「アフォーダンス (affordance)」という英語です。ダーウィンがミミズの穴をずっと観察しているとミミズが穴を掘って土を中から出していくのですけれども、最後に工夫しながらその入り口に草を必ず刺したというのです。おそらく口か何かで刺すのでしょうね。ダーウィンが観察してみるとどうやら巢に水が入らないようにしている。つまり下等動物とはいえ単なる反射行為、試行錯誤では説明がつかない。動物の行為の柔軟性は、人間が考え出した説明の枠組みを超えていた、ということをダーウィンは書いているのだそうです。

そこでジェームス・ギブソンは「アフォーダンス」という言葉を思いつきます。環境が動物に提供するもの、動物の行為のリソースになるもの。例えば皆さんは今ここにいま座っています。座っているということは、地面が、あなた

方が座るといふ行為を支えているわけです。しかし、座らないと地面が支えるという行為をしてくれるとは気がつかない。人間が初めてある行為をしてみて、その行為に対して反射的にあることをさせてくれる、そうした潜在的可能性を「アフォーダンス」というわけです。

例えば川を見ているだけでも流れているだけだが、もしそこに裸になって浮かうとすれば浮くという行為を水は支えてくれるわけです。泳ぐという行為をサポートしてくれるのです。これを「アフォーダンス」というのです。今座っているのは大地が私たちの重量を支えているからこそ、座ってられる。この「動物のある行為を可能にする」という機能こそが「アフォーダンス」です。「アフォード」というのは英語で「～できる」、「～してくれる」という意味です。海に船が浮かぶのも、海水が船を下から支えるからです。

ギブソンはこういっています。「最初に世界にあったのは動物の複雑な知覚システムではなく、複雑な環境であった」。ある行為、例えばご飯を食べるでも良いのですが、これをするするとそれに伴って環境の見え方が変化するわけです。ご飯を食べようとする、その前に並んだ茶碗とか、箸とか、おかずとかそういうものが見えてきますが、それぞれについて自分がどうするのか考えながら行動します。次には何を食べようと予想すること、予期すること、計画することもできてくるわけです。そのような形で、人間の外部の環境との相互作用の繰り返しの中で、知覚あるいは知性、精神というものが生まれてくる。だから環境の喪失ないし単純化、あるいは接触回避をしていけば、知覚や知性や精神は未発達の状態にとどまる可能性があるということです。経験したことのないことについて我々はほとんどわかりません。このことは、子どもの発達にとって決定的に重要なことではないかと私は考えます。

地域における「環境体験」は、住民主体の地域づくりの人的社会的基盤の認知となるのですが、別の言い方をすれば、地域の個々の空間の価値の認知であるのです。自分の周囲の場所

で、どんなことができるのかということは、「場所の価値」そのものなのです。大人達にせよ子ども達にせよ、地域でどれだけ地域の環境を体験しているのか、それによって、これから地域づくりをしようとしていくときの人々の想いが変わってきます。何もしたことのない人ばかりが集まって、さあ住民主体の、住民主導のまちづくりをやろうとしても、何をしたいのですか、となります。しかしそこにいる人達が、非常に豊かな環境体験をしているとすれば、それは豊かな地域づくりになるのです。

私はこれを読んだときにこれはおもしろいと思ったのですが、それと同時に住民参加といっても住民がどれだけそこでその地域を味わってきたのか、その地域でどんな経験をしてきたのかによって住民参加の成果も相当違ってくるのではないかと思いました。住民主体ということで、計画を支援するプランナーが単純に住民に投げてしまってもいけないということです。

私の研究室でアフォーダンスの実証研究に取り組みましたので、ここでアフォーダンスに関する大学院生（鹿倉史夫君）の修士論文を紹介します。

私がまちづくりで支援をした滋賀県甲良町という農村的な地域です。伝統的な行事も行われ、集落内には水路が流れていて、農村景観がまだ維持されています。

調査対象者として 10 代～70 代の人をそれぞれ集めてまちを歩き、いくつかの定められた場所で「この場所であなただけはどんなことをしてきましたか」という聞き取り調査をすると、どうやら 40 代から 50 代の間に利用経験に差が生じているということがわかってきました。

例えば 68 歳の男性です。どこの場所でも「こんなことをした」「あんなことをした」とたくさんの行為を答えます。炊事で水路を利用した、風呂水も汲んだ、便所の汲取と排水でもこれを使った、魚をとるときに手づかみで捕まえた、ワナも使った、漁具も作った、泥が溜まるので川さらいもした、水車で粉を挽いた、小鳥をとったなど、色んなことを言います。61 歳だと少し減ってきますが、それでも色んなことを言っ

ています。共通の項目も11項目くらいあります。

これに対して、20代、30代では、ガクッと減ります。37歳の男性は、カニ、タニシをつかんだ、ドジョウをつかんだ、水遊び、火回しをしたなど非常に少なくなります。同じ所を見ていても、20歳の男性も人によっては30代の人よりもちょっと多い人もありますが、60代の男性と比べるとうんと少なくなります。

具体的にどんなことをしたのかを少し紹介しますが、20代の男性は手づかみのみで魚を採るという経験がありました。場所は分土工（集落の中を流れる水路の水を分ける施設）という少し水が止まっている場所です。60代では漁具を使った、ワナを使った、手づかみの3通り。その漁具のヤス、シャクリ、タモ網を自分達で作ってやったそうです。また、ワナなども手製して夜に水路にしかけて、朝になったらウナギやドジョウが入っている。皆さんもこういう遊びをした方がいらっしゃるのではないかと思います。ドジョウ用のワナ、ウナギの取り方なども色々説明してくれました。こういうのが20代になるとほとんどなくなってしまいます。

手づかみの方法を尋ねると、アユなどは壁沿いに遡上してくるので壁のあたりに手を入れてつかむのだという答えでした。水草の中に入っているのだから水草をつかむ。こういうようなことをしてきた大人と、してこなかった子どもでまちづくりに対する姿勢はまったく違わざるを得ないのです。

理屈からいえば、それぞれの場所、それぞれの漁法に対する自然からの応答である「アフォーダンス」も違ったものがあるということなのです。環境の利用経験が多い方が環境から引き出せる情報量が多い。多くの「アフォーダンス」を認知した世代には共通の経験内容が多い。利用経験が少ない、もしくはない場合は、景観中の「アフォーダンス」を認知できない場合がある。つまり環境の意味というものの、自分にとっての意味、もっといえば「価値」です。環境を経験したかどうかというのは、環境の価値が理解できるかどうかの差になってくるということです。

この地域では、水路にふたをして、集落の道路を広げようという議論があったのですが、結果的には中止になりました。部分的に待機場所を作り交通の利便性は確保することにしました。やはりこういう用水路や排水路には単に水を流すだけではなくて多面的な機能があって、自分たちの遊びの場、思い出の場、地域の価値を残そうということです。

もう1つおもしろい議論を紹介します。レルフという人が「場所性 (placeness)」とか「没場所性 (placelessness)」とかいう言葉を使って色々説明しています。場所というのは人間が生きている身の回りの環境のことです。人間が生きているということは身の回りの環境に自分なりの意味を与えることです。これはさっきの「アフォーダンス」の議論もそうです。あそこで魚をとったということは、そこにそれなりの価値があるということが自分にとってはわかります。そういう意味では、自らの経験に基づく価値付けが個々の環境に与えられることによって、分節化された空間の集合体として場所があるということになる。

要するに、自分にとっては非常に意味のある空間がそこに展開するようになるのです。これを「場所性」と呼んだのですが、だんだんとその「場所性」が無くなってきているのではないかと。どこへ行っても同じような場所で、地域の道路だつてとにかく車が通れると良い、というので拡張して、今まで生け垣があったものがなくなる、水路があったものがなくなる。非常に単一機能になってしまい、「個性的な場所の無造作な破壊」と彼は言っていますが、場所の意義に対するセンスの欠如がもたらす規格化された景観、例えば日本のバイパスなどはそうです。パチンコ屋がどこのバイパス沿いにも展開するというおぞましい景観になっています。それを彼は「偽物の場所」と呼んでいます。このようなことをプレイスレスネス「没場所性」と彼はいいますが、そういう場所が残念ながらはびこってしまった。これはまずアメリカがそうです。日本もそれに追随してきていますから、日本はもっとそうかもしれません。

ヨーロッパはそうではありません。非常によくその辺をわかっていて、伝統的な景観をよく残しています。

「没場所性」は何を意味するのか、人間にどのような影響をもたらすのか、おそらく、人間はその地域への関心を無くしていきます。「どこへ行ったっていいじゃないか、何も熊本にいたっていいじゃないか。大阪へ行こう、東京へ行こう。」となってしまうわけです。だけど、熊本の川や雑木林や田んぼで徹底的に遊んだ子どもは、「いやいや自分はここに残るんだ。」となっていくでしょう。これが大事だと私は思います。事実、今日も聴きに來てくれている南阿蘇村白水の大津耕太君は、東京の大学、ドイツの大学で学んで熊本に戻った若者です。子どものころ、よく川などで遊んだそうです。

ここで学生の卒論を紹介します。この新田将之君の論文では、川が地域の交流の場であり、川ですごく遊んでいる子どもの姿を捉えており、川に学ぶ社会、川で遊べる社会をある意味で理想的な社会としています。コンクリートの三面張りではなくて、川本来の微小な構造を川が持っているということが重要であり、多様な流れがあることが重要だというようなことを学びながら、実際に川での遊びを調査しました。

調査したのは岐阜県郡上市八幡町です。図 3 は子ども達が遊んでいる様子です。本当に自然



図 3 川遊びの場所と観測点

(子供の川遊びに求められる河川構造と社会的条件に関する考察

—郡上市八幡町長良川上流域を事例として—

東京農工大学大学院農業環境工学専攻 新田将之)

の河川に飛び込んだりしています。浮き石という名前の岩があつて、そこに立ちます。別の子どもは頭を先頭にして川を流れてきて、ここにぶつかってこの子達を落とす、ボウリングと称する遊びをしたりしています。すばらしいでしょう。寒くなると岩の上へあがつて体を休める。こういうことをやるわけです。大体6歳くらいからここで遊びを始めます。熊本ではどうか私は知りませんが、日本中のほとんどの川ではこのような川遊びは禁止されているでしょう。

調査した学生は川のこの部分(図 3①から⑩で示した 11 箇所の観測点)に立って、子ども達の遊びについて、場所、時刻、学年、性別、行動などを記録しました。

子ども達はこの橋(図 4)から飛び込むわけですが、「カウントダウンしてちょうだい」とか言って、ここを歩いている観光客や市民に呼びかける。そして「5、4、3、2、1、ドボン」と飛び込むわけです。もう何十年もやっていますが死んだりした子どもは一人もいないそうです。何十年というか昔からですから、100 年以上上かもしれません。このような川での遊びなどの行動が子ども達の地域への愛を育んでいるに違いないと私は思うのです。



図 4 橋から飛び込む！

(子供の川遊びに求められる河川構造と社会的条件に関する考察

—郡上市八幡町長良川上流域を事例として—

東京農工大学大学院農業環境工学専攻 新田将之)

■第三部 子どもが人として成長するプロセス ー地域愛はどう育つのか

図5は動物の脳の進化の状態です。魚類から両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類へと進化してきました。大脳の後ろの部分の中脳、小脳、延髄の部分はそれほど変わっていませんが大脳の部分が大きくなります。中脳、小脳、延髄を中心とした「爬虫類脳」は、運動機能を司り、大脳を中心とした「哺乳類脳」は社会的機能を司るというように、機能が違うようです。私はそれぞれの機能の発達に関する動物実験から学ぼうとしました。

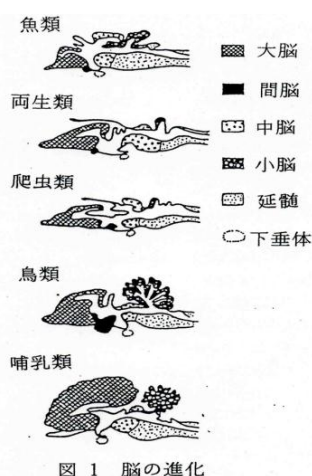


図5 動物の脳の進化

(千葉康則『ひらめきの開発』講談社現代新書,1985年)

まず猫の実験です(図6)。猫Aは、あっちへ行ったりこっちへ行ったり、この機械の中では自分の意思で動けます。猫Bは頭だけ出して閉じ込められて猫Aと同じようにしか動けない状況です。

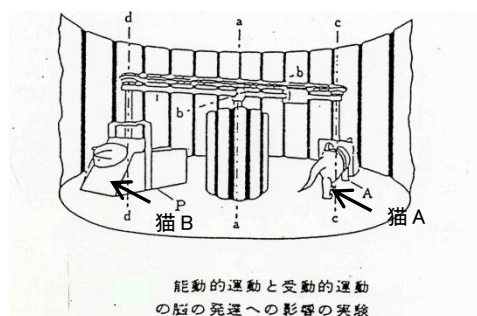


図6 ハインの実験(1963年)

(津本忠治『脳と発達』)

双子の猫を生後すぐに暗闇の中に入れて生後8-12週目に1日3時間だけこの装置に入れました。2匹の猫は視覚に同じ情報を受けますが、猫Aは能動的運動ができ、猫Bは受動的運動を強いられています。その結果、受動的運動を強いられた猫Bは段差が識別できない猫になった。つまり猫Aは子どもの時代に自由に自分で動き回れるという環境の中で育ち、段差を自分で確認し、運動能力を発達させることができましたが、猫Bは猫Aと同じように動いているにもかかわらず、あるいは視覚に入ってくる情報は同じであるにもかかわらず、段差が確認できない猫になったということです。つまり爬虫類脳について自然的環境に対応する機能の未発達がこの実験では捉えられました。

もう一つは離乳から80日間3つの異なった環境でネズミを飼育した実験です(図7)。これは感覚刺激、あるいは社会的刺激の違いによる発達の実験です。Aは3匹います。これを標準環境としましょう。Bでは1匹で刺激の乏しい環境。Cには6匹か7匹いる刺激の豊富な環境、これで比較しました。

このような幼少時に仲間の多いネズミと少ないネズミを比べた実験では大脳皮質の体重比に有意の差が現れました。大脳皮質というのは社会的環境に対応する機能といわれています。

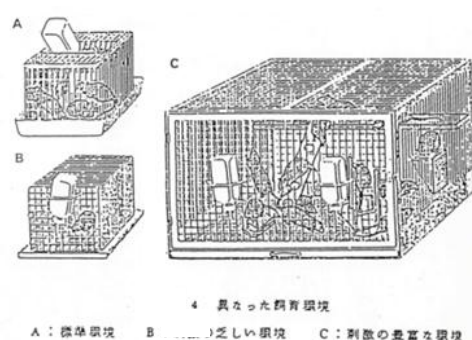


図7 ローゼンバイクの実験(1960年)

(津本忠治『脳と発達』)

それからインドで野生児が発見されたという事例がありますが、この事例から人間は乳幼児の生育環境に影響を強く受ける動物だということが推測されます。生後すぐ人に育てられた犬

や猫は朝起きたとき「メシ」というだろうか。言えば楽しいですが、言えないですね。しかし逆にオオカミに育てられた人間の子はオオカミ語で「メシ」と言っている。この違いは何だろうか。

どうやら人間の脳の0歳から5歳までの最も重要な発達期にその脳にどういう情報が入ってくるのかによって、脳の機能にかなりの相違が生じてしまうということです。そういう意味では子どもの人間性、感性や社会力をどのように創り出すかは非常に大事なことになります。今どういう環境で子どもは育っているのか。乳幼児から5歳までの間でゲームやテレビなどの情報機器を1日何時間も使っている子どもがどんな影響を受けるのだろうか、考えるだけでも恐ろしいです。関心のある方は『子どもの社会力』という門脇厚司さんの本を読んでください。社会力についてとても参考になることが書かれています。

高い先天・生得的能力を持つヒトの子であっても、ヒトが社会力を獲得するプロセスにおいては、置かれた環境によって、脳の働きが変わってくるということです。新生児の高い先天的な能力—生後4日の子が母国語と外国語を弁別するとか、生後直ちに母親の顔を認知するとか—はあるのですけれども、しかし環境順応性が高いだけに、その時期の環境というのは極めて重要だということになります。

精神医学者の福島先生は次のようなことを言われています。現代っ子の心理を理解するには、脳が働く基本的プログラムも現代っ子では大きく変わってきていることに注目しなければいけない。コンピュータに例えるなら、機械（ハード）だけではなくてその基本ソフト（OS）が大事なわけです。脳にも脳の基本ソフトとしてのOSが必要なのですが、そのOSが生まれてから大体2〜3年の間にできるのです。そのときにどういう育て方をしているのかによって変わってしまう。

現代のテレビから放射される大量のイメージ的バーチャル情報を含む映像は、戦前生まれの人間が乳幼児のときに受けた、母親などの家族

からの語りかけ等による情報の質と量に比べて、異質かつ大量になっていて、「出生後直ちに人の感受性の限界に達するほど」と福島先生は言います。

今、本当にお母さんたちは忙しいし、なかなか大変なのですけれども、テレビに子育てを任せているという面があるわけです。ベビーチェアに子どもを座らせてテレビを見せる。テレビは非常に刺激がありますから子どもは喜んで見るのですが、子どもにとっては脳そのもののOSが作られているときにそういう環境で一日何時間もさらされるというのは大変な問題です。しかしこのことを誰も言わないのです。多くの方はそれに気づかないし、ましてマスコミはそんなことは言わないでしょう。これは大問題なのです。

また、福島先生はおっしゃいます。「とりわけ、テレビの暴力番組やお笑いタレント的人物らの言動に影響を受けていることが危惧される。このような子ども達の思考形式の変化は子どもの価値観にも影響を及ぼす。」

「新人類は、道徳や倫理といった『善悪』の枠組みに規定されない。むしろ、フィーリングや感情などに支配される。フィーリングの合うものは『カッコいい』として喜ばれ、あわないものは『ダサイ』として忌避される。友達の間でも、『面白い』こどもがウケ、まじめなだけの誠実な仲間は、『つまらない』やつとして見捨てられる、こういう傾向になってきている」というのです。

さらに「もともと人間は、乳幼児のころから、言語を媒介にして次第に論理的にものを考えるようになる。しかし近年の子どもらは、テレビなどの影響を受けて、イメージ的・コラージュ的・直感的に考える傾向にある。このため、『欲望のそのときその場での満足』を求める、つまり、幼児的な＜快樂原理＞に基づいて衝動的に行動する大人が増えることが危惧される」ともおっしゃっています。

つまり論理的でなくなるということです。しっかり考えて物事を判断する、あるいは様々な感情があっても一度自分の中に吸収してから、

行動できるような人間にはなかなかないということです。

問題は乳幼児の脳の OS 形成期における、外部からの情報の質と量です。テレビやスマートフォンなどからの大量の「非論理的・イメージ的情報」の海に「脳が溺れる」子どもたち。これは私の表現です。あまりどんどん情報が目の前を流れているのでは脳が対応できない、対応できないと論理的な力がそこで育たないということになります。周囲に存在する家族や自然との穏やかな接触による適度かつ良質な情報刺激でこそ、脳の OS は健全に育つということ、我々はそれを知らなかったわけです。初めてこんなことが専門家によって書かれるようになった。残念ながらテレビではほとんど言わない。

その背景には、社会力を育みにくい競争社会や技術、経済が高度化し、人と人、人と自然の関係を断ち切る方向、それが進歩だ、それが幸せだというような価値観があります。だから「お金さえあれば生きられる」というようになっていく。

子どもによる他者との相互交流、これが遊びですが、本当は遊びなくして子どもは育たないのです。しかし遊びの条件としての3つの「間」を失うようになってきています。3つの「間」とは遊ぶ時間、遊ぶ仲間、遊ぶ空間ですが、これが本当になくなってきている。学校、家庭、地域がどうこれを保障するかです。

世界中がこうなっているかという、必ずしもそうではありません。ドイツでは小学校から高校まで午後1時で学校は終わりです。そしてお父さん達も会社から帰ってきて自宅で一緒に昼ご飯を食べます。ドイツでは昼がごちそう(正餐)です。それには理由があります。夜は音楽会などがあるからです。だから夜はパンとコーヒーくらいで済ませますが、昼は子ども達とゆっくり食べる。その後子ども達は地域の中のスポーツや音楽のクラブ活動に行きます。地域のクラブだから大人あるいは老人から子どもまでほぼ一つのクラブの中で、地域の中で育っていきます。日本において小学校が放課後まで体育のクラブなどで、夕方遅くまで子どもを縛ると

いうのは、私はちょっと異常だと思います。

そして受験戦争そのものも異常だと思わざるを得ません。本当にしっかりした思考能力を育てるのではなくて、暗記の能力、あるいは出題者がどういう答えを欲しているのかというのを類推する能力を育てる。それは大人になって「余計なことは言わないで働く」というような、「自分の頭で考える必要は無いから働け」というような人間の育て方をしているとしか思えないです。創造力のある人間を育てるような教育になっていないと私は思います。そういう日本の教育も含めて、全体的な問題がこの遊びの喪失になっているのだと思います。

最後になりますが、子どもの遊びの実態を調査しました。外遊び、自然との触れ合いがどんな実態になっているのか、それからそれをよくしている子どもとそうではない子どもの間に地域への愛着に違いがあるのかを調べてみました。調査対象は小学校4、5、6年生です。埼玉県川越市と滋賀県甲良町での調査です。学年を追うごとに外遊びは少なくなります。これはやはり中学の受験の影響も入ってくるのでしょうか。遊びの内容は、ほとんどがテレビ・ビデオ、本や漫画、テレビゲームです。スポーツも少しはありますが。

それから親世代の子ども時代はかなり外で遊んでいました。子ども達の親ですから40歳くらいのお母さん達でしょうか。また「子どもが自然の中で遊んだ方が良いか」という問いに対してほとんどが「そう思う」と答えています。建前かもしれませんが。次に地域意識と野外での遊びの関係を調べました(図8)。

川越市では「川越市が好き」と答えた子どもの半分近くが自然触れ合い度が高いのですが、好きではないと答えた子どもの66%が自然触れ合い度が低いという答えが出ています。つまりよく外で遊んでいる子どもほど川越市が好きと答える傾向があるということです。

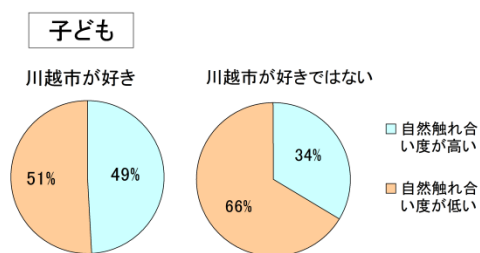


図 8 地域意識と野外遊びとの関係
〔埼玉県川越市〕(吉岡繁樹)

大人についても「あなたはまちづくりへの関心が高いですか、低いですか」と聞いてみました(図 9)。関心が高いと答えた大人は、どちらかと言うと、自然触れ合い度の高い大人が多く、低い大人は自然触れ合い度の低い大人が多かった。

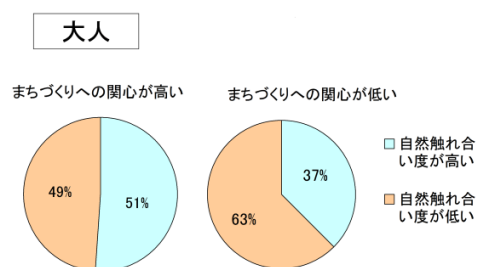


図 9 地域意識と自然触れ合い度の関係
〔埼玉県川越市〕(吉岡繁樹)

次に、川越市が好きだという子どもは将来暮らしたいという子どもが 39%、川越市が嫌いという子どもで将来暮らしたいという子どもは 6%に過ぎません。つまり川越市が好きほど、当たり前でしょうが、将来もここに住みたい、と答えています。

滋賀県の甲良町でも同じ調査を行いました(図 10)。これはもっと極端に結果が出ました。甲良町が好きだという子どもの 93%は外でよく遊ぶという子どもでした。逆に町が好きではないという子どもには外で遊ばないという子どもが圧倒的に多いという傾向です。ここは農村地帯です。農村地帯ほどこの傾向がでる可能性があるようです。

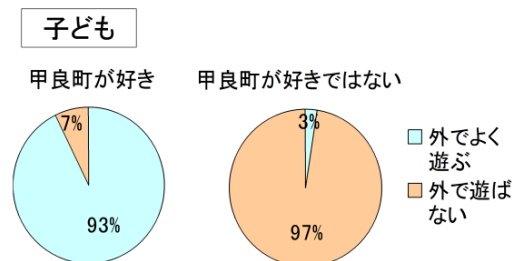


図 10 地域意識と野外遊びとの関係
〔滋賀県甲良町〕(杉浦健介)

それから大人についても調査しています。まちづくりへの関心が高い大人の 66%が子どものころに自然との触れ合い度が高い大人です。関心が低い大人は自然触れ合い度が低かった大人です(図 11)。

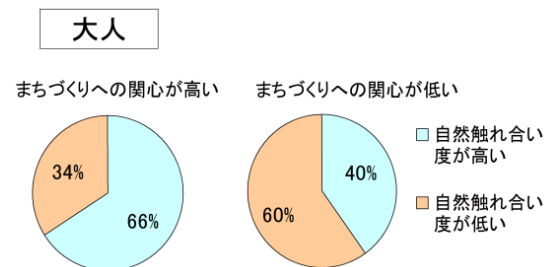


図 11 地域意識と自然触れ合い度の関係
〔滋賀県甲良町〕(杉浦健介)

つまり小さいころからよく外で遊ぶということが地域への愛着を育て、また将来もそこに住むという傾向を強めるということです。だから今、農山村では過疎化で非常に困っていますが、その過疎化を食い止める一番底辺、ベースにある対策は、小さい頃から子どもをよく外で遊ばせることです。そしてそういうことができる条件を地域に作ってあげることです。

農山村でもむしろ都市化を求めて結果として子どもの遊び場を少なくする傾向があるかもしれません。私が以前、川越に住んでいたときの出来事です。それまで子ども達がキャッチボールをしたり、サッカーをしたりしていた駅の前の原っぱがあった場所に、柵が張られてゲートボール場になってしまうということがありました。一体大人たちは何を考えているのだと

思いました。そのとき私はここまでの研究は進んでおりませんでした。直感的に大人って何を考えているのだろうと思いました。

いくら民主主義の世の中だから、住民達意見を吸い上げていこうとしても、子どもの意見はほとんど吸い上げられないということです。住民達の意見を聞いても、もし意見を聞く相手が大人ばかりであれば、「俺たち大人のためのゲートボール場を作ってくれ」という話にしかない可能性があるということです。子どもがすくすく育ち、将来もこのまちにとどまって、まちづくりに参加する大人を増やすには、こういうことをよく知ってもらわなければならないのです。子ども達の遊び場、子ども達の遊ぶ時間、仲間、空間をつくらないとまちはよくならない、ということを皆に知ってもらいたいと思って今日はお話をさせていただきました。

どうもご清聴ありがとうございました。

【講演録要旨】

地域計画学、水資源計画学がご専門で全国各地の地域づくり支援にも取り組まれ、現在は子どもの成長と自然との関わりなどの視点からの研究・提言をされている東京農工大学名誉教授の千賀裕太郎氏をお招きして講演会を開催しました。

講演会では、「日本の国土形成基礎論」として日本の唱歌に歌い込まれたかつての日本の国土を振り返り、また、「人と環境との関係性原論」としてアフォーダンス（環境と知性の形成の関係）や「場所性」の2つの理論について紹介されました。最後に、現在、子どもの外遊び・自然との触れあいが減っている現状に警鐘を鳴らしつつ、子どもの成長に地域の自然や人との接触が深い関わりがあることや、そのような関わりによって地域愛の涵養が図られるという提言をいただきました。



<研究員報告>

「熊本地域の地下水保全事業-持続的協働モデルとしての特徴と課題-」

熊本市都市政策研究所 研究員 渡辺 亨

熊本地域の地下水保全事業について、その特徴と官民協働モデルとしての課題の解決策の方向性について報告しました。



熊本市都市政策研究所 第9回講演会

日時：平成26年8月12日（火）15～17時

場所：熊本市国際交流会館 7階ホール

次 第

1 開会

2 主催者挨拶

○熊本市都市政策研究所 所長 蓑茂 壽太郎

3 講演

『子どもが地域愛を育むプロセス

ーまちづくり・地域活性化原論としてー』

○国立大学法人東京農工大学 名誉教授 千賀 裕太郎 氏

4 質疑応答

5 研究員報告

『熊本地域の地下水保全事業

ー持続的協働モデルとしての特徴と課題ー』

○熊本市都市政策研究所 研究員 渡辺 亨

6 閉会

※ 講演会終了後、ティアのもったいない食堂・I K O I C A F Eで
意見交換会を実施します（会費2,000円）。当日参加も可能です。

講演者のご紹介

国立大学法人東京農工大学 名誉教授

千賀 裕太郎（せんが ゆうたろう）氏



東京農工大学名誉教授、千賀まちづくり研究所長、農学博士。専攻：地域計画学、水資源計画学、全国各地域のまちづくり支援にも携わっている。

1948年北海道生まれ。1972年東京大学農学部卒。農林省、宇都宮大学を経て東京農工大学農学部教授、棚田学会会長、日本景観学会副会長、一般財団法人日本グラウンドワーク協会専務理事、食料・農業・農村政策審議会、河川審議会、文化審議会等の専門委員、中央放送番組審議会委員（NHK）、朝日農業賞審査委員（朝日新聞社）、日本水大賞審査委員等を歴任。

都市政策研究所 ～これまでの講演会～

第1回 平成24年10月23日	「熊本市都市政策研究所に期待すること～少子高齢化社会に向けて」 一般財団法人計量計画研究所 代表理事 黒川 洸 氏
第2回 平成25年2月15日	「環境未来都市 くまもとの都市計画ビジョンと課題」 国立大学法人熊本大学副学長 両角 光男 氏
第3回 平成25年5月10日	「日本農業の活路を探る」 名古屋大学農学部教授 生源寺 眞一 氏
第4回 平成25年7月2日	「都市づくりと流域環境思考」 東京都市大学教授・造園家 涌井 雅之 氏
第5回 平成25年8月22日	「地域経済の再生と構造変化」 慶應義塾常任理事・慶應義塾大学名誉教授 清水 雅彦 氏
第6回 平成25年10月11日	「市民協働のまちづくり～ワークショップを知ろう～」 熊本県立大学教授 明石 照久 氏
第7回 平成26年2月7日	「元気で楽しい都市に観光客はやってくる」 公益財団法人日本交通公社 シニア・フellow 小林 英俊 氏
第8回 平成26年5月22日	「生涯現役社会づくり」 NPO 法人アジア・エイジング・ビジネスセンター理事長 小川 全夫 氏